

低年齢で帰国した児童の 第二言語能力 ー リテラシーの観点から ー

異文化間教育学会 第38回大会

静岡英和学院大学 谷口ジョイ

研究の背景

帰国子女とは

= 海外勤務者等の子女で、引き続き1年
を超える期間海外に在留し、帰国した児
童・生徒

年間約1万人

研究の背景

帰国子女のことばをめぐる議論は下火

例：80年代半ばの異文化間教育学会

→ 約1/3の会員の研究対象は帰国子女
(Goodman, 1990)

2016年度 発表件数 0件

「**新しい特権層**」(Goodman, 1990)

研究の背景

現地語の保持・伸長に関わる要因

- ✓ 渡航時の年齢
- ✓ 在留期間
- ✓ 帰国時の年齢
- ✓ 本人の性格や適性
- ✓ 就学形態
- ✓ 言語環境
- ✓ 言語接触量

研究の背景

先行研究＝口頭産出能力の保持

統語的、形態的な正確さ・複雑さの変化 cf.

Yoshitomi (1994)

帰国子女のリテラシー能力の保持は研究
対象とされてこなかった

リテラシー:

知識の獲得 新たな概念の構築

情報の共有 問題の解決

研究課題

- (1) 調査協力者が海外で獲得した英語リテラシー能力は帰国後どのように変化するか
- (2) 調査協力者の英語リテラシー能力の保持・伸長にはどういった要素が関わるのか

理論的枠組み

(1) 社会文化的アプローチ
= 読み書き能力 + 社会的なもの

(2) Translanguaging (García and Li, 2004)

バイリンガルの言語運用 = not as involving two separate linguistic systems but as “*one linguistic repertoire*”

理論的枠組み

Translanguaging

- Rin (帰国後 2;6)

Rin: ...um...um...「夜になると」って何で言うんだ？

Examiner: Uh... At night?

Rin: えっと、これ、どういう意味ですか。((“not aware”を指差しながら))

Examiner: んと、気づいていなくて。

Rin: ...She goied too far to pick sticks, but she not aware of the growing darkness.

調査協力者

調査協力者は海外生活を通じて日本語と第二言語である英語を習得し、帰国時に年齢相応の英語リテラシー能力を身につけていた8名の帰国児童（4組の兄弟姉妹）

- 現地校における成績表
- 教師のコメント
- 州の標準化されたテスト

調査協力者

協力者	性別	年齢	渡航	帰国	滞在	在留地
So	男	10;11	6;4	10;7	4;4	CA
Rin	男	8;7	3;11	8;3	4;4	CA
Eri	女	9;11	4;4	9;4	5;0	UAE
Saya	女	7;3	1;8	6;8	5;0	UAE
Meg	女	11;0	1;3	9;6	8;3	CA
Rico	女	8;6	0;0	7;0	7;0	CA
Nana	女	9;9	5;0	9;9	4;9	CA
Ash	男	7;11	3;2	7;11	4;9	CA

調査協力者

- 言語喪失が急速に進む年齢グループ
(Olshtain, 1989) = 8歳以下
- 言語保持の程度を左右する境界年齢
(cut-off period, Fujita, 2002) = 8-9歳
- 言語保持が比較的容易な年齢グループ

調査協力者

- Tomiyama (2009):

帰国児童の兄弟姉妹を調査する利点

- 家庭環境、言語環境、在留期間、帰国後の経過年数
- 帰国後の言語保持に影響する個人的要因として「**年齢**」について検討することが可能

研究方法

- データ収集:

(1) DRA (Developmental Reading Assessment)
調査者と1対1の読解力査定 4～10週間おきに24～36ヶ月

「全体」を通して読む姿勢

作品全体をどのように読み、把握するか

(2) 保護者への質問紙調査、面接調査、家庭・教育機関におけるフィールドワーク:約7年間

研究方法

Reading Session:

- (1) 本の選定
- (2) 冒頭部分の音読
- (3) 物語の予測
- (4) 黙読
- (5) 物語の再生
- (6) 内容理解に関する質問

研究方法

冒頭部分の音読



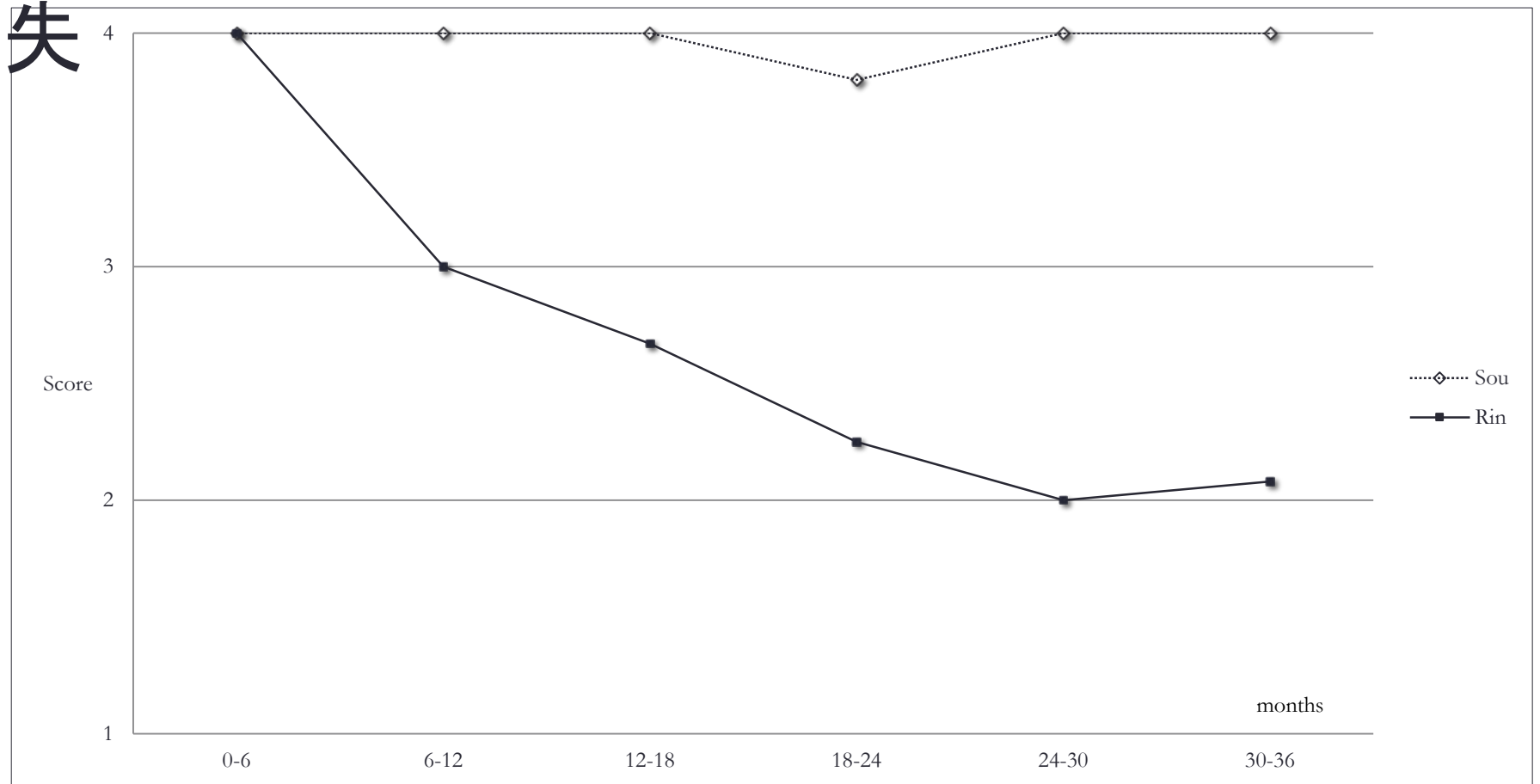
研究方法

物語の再生



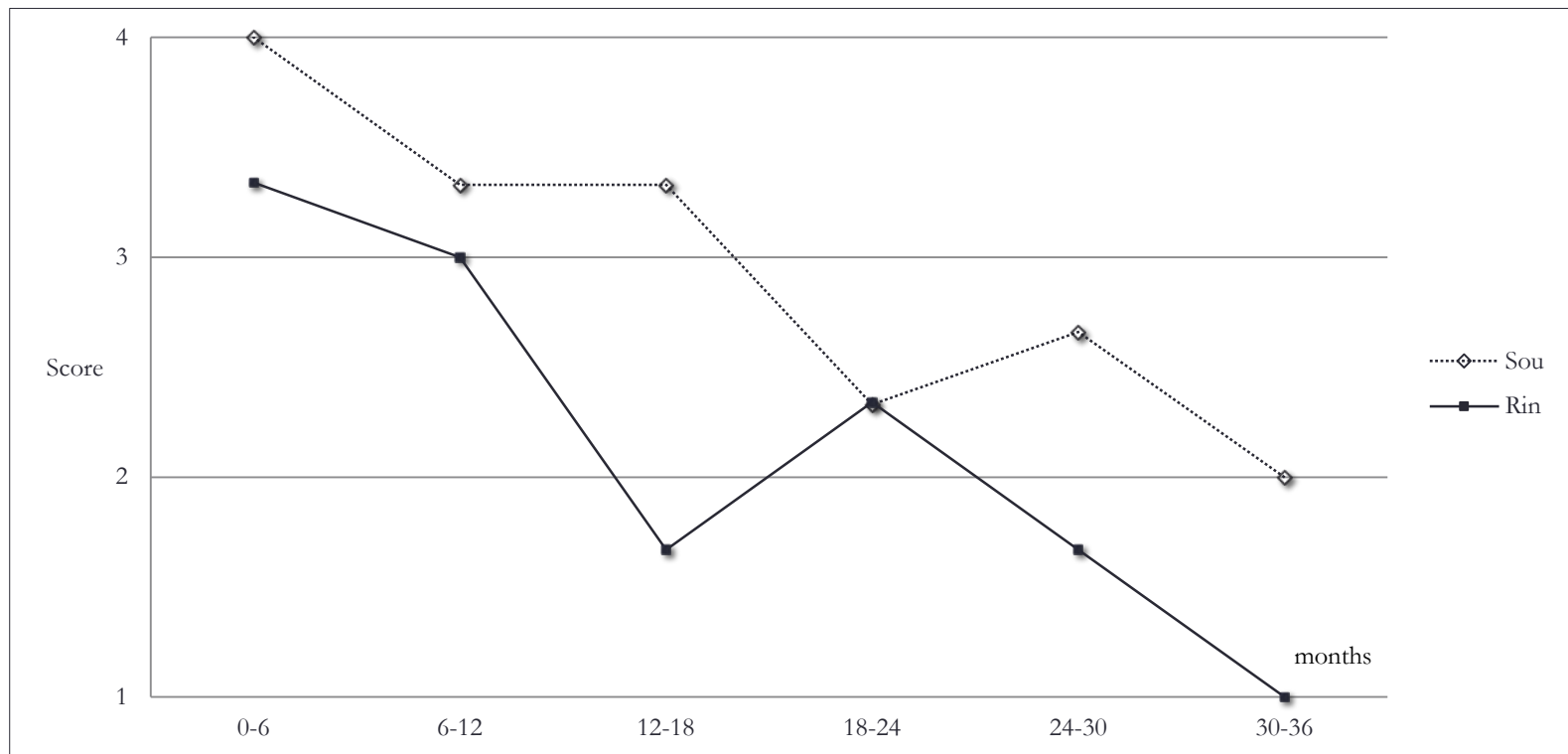
結果と考察

(1) 音読能力: Rin (SP1弟)にのみ顕著な喪失



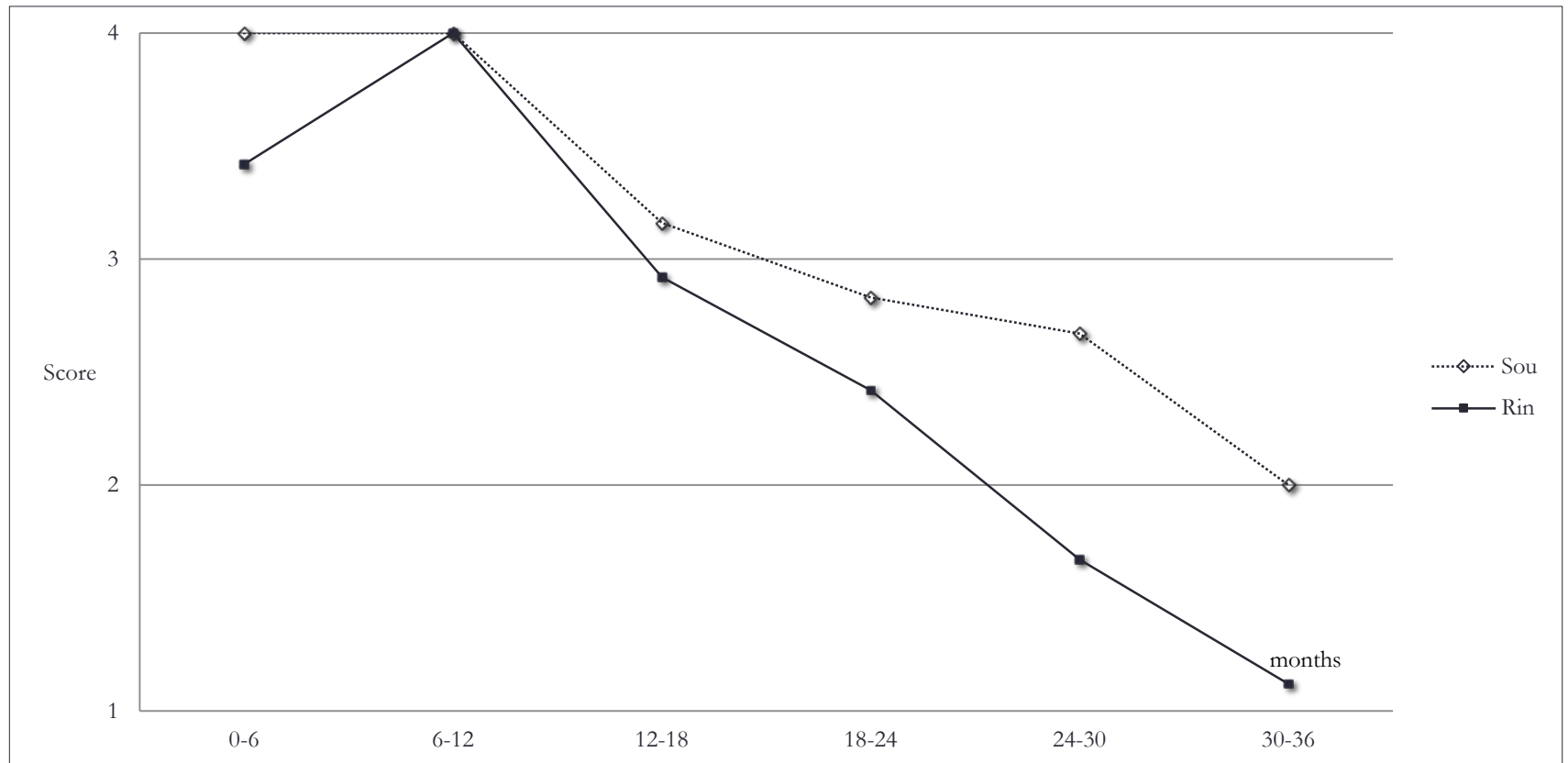
結果と考察

(2) 物語の予測: Rinが帰国後1年、Sou (SP1兄)は1年6か月で喪失



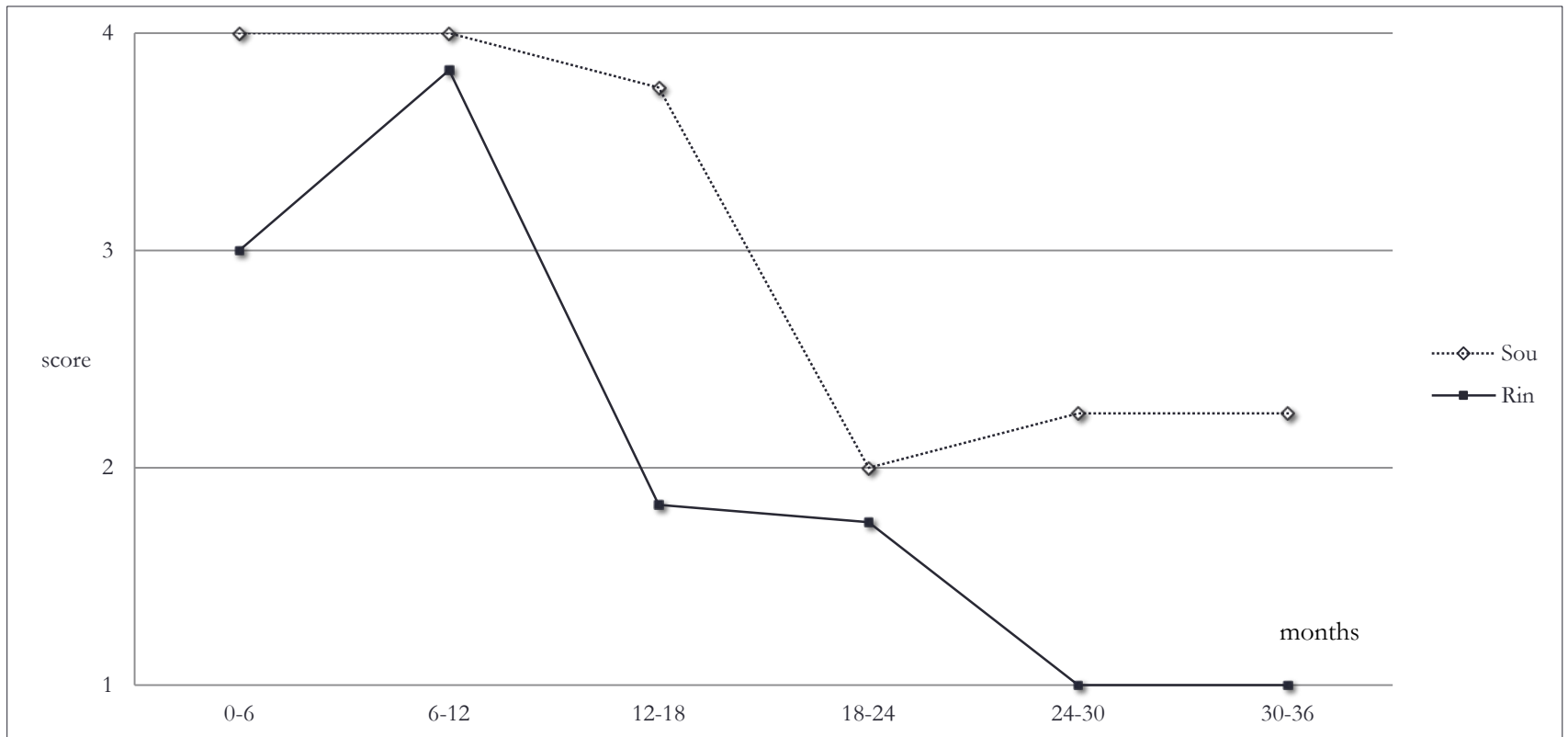
結果と考察

(3) 物語の再生: Rin、Souともに帰国後1年で喪失



結果と考察

(4) 物語の解釈: Rinが帰国後1年、Souが1年6か月で喪失



結果と考察

- SP1 So(兄) Rin(弟)

- 現地語保持に対する**父親の消極的な態度**

例「自分も大人になってから必要に迫られて英語を身につけた。子ども達もそうすべきだし、忘れてしまっていていいと思う。」**「基盤は残っているはず」**

- 英語の保持に結びつくような活動には不参加

- 日本の学校への適応や中学受験が最優先課題

- 英語使用の機会: 4週間から8週間に一度の本調査のみ

- リテラシー活動=**「学習」としての読み書き活動のみ**

結果と考察

- **SP1:**
- 帰国後のリテラシー活動は「学習」中心
- 英語を用いた人的ネットワークを持たない
- 保護者の言語保持に対する姿勢が消極的
- **SP2/SP3/SP4:**
- 帰国後も英語による読書（娯楽のためのリテラシー活動）を継続
- **居場所、拠り所としてのリテラシー**
- 滞在国で形成していた交友関係についても、保護者の支援により維持されている（SP4は約1年）

まとめ

調査協力者について:

(1) 「楽しみのため」「社会的インタラクシヨンのため(メールのやり取りなど)」のリテラシー活動

(2) 第二言語を使用する人的ネットワークの維持、及びそれを支援する家庭環境

→ 保護者の意識はリテラシー保持に間接的に影響

まとめ

(3) 中学入学後の変化：英語の威信性

(4) 子どもたちは、与えられた環境の中で
〇、**自分に必要なリテラシー能力を取捨選択**
し、主体的にリテラシー活動に携わっていた

(5) 成長とともに、自身のリテラシー能力を肯定的に捉えていた

参考文献

- García, O., & Li Wei. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. London, UK: Palgrave Macmillan Pivot.
- Goodman, R. (1990). *Japan's 'International Youth': The Emergence of a New Class of Schoolchildren*. Oxford: Clarendon Press.
- Fujita, M. (2002). *Second language English attrition of Japanese bilingual children*. Unpublished doctoral dissertation, Temple University, Tokyo, Japan.
- Olshtain, E. (1989). Is second language attrition the reversal of second language Acquisition? *Studies in Second Language Acquisition*, 11(2), 151-165.
- Tomiyama, M. (2009). Age and Proficiency in L2 Attrition: Data from Two Siblings. *Applied Linguistics*, 30, 2, 253-275.
- Yoshitomi, A. (1994). *The attrition of English as a second language of Japanese returnee children*. Unpublished doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.

